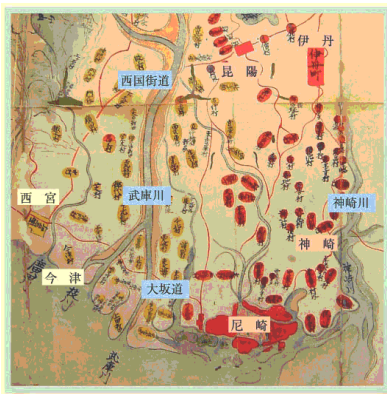
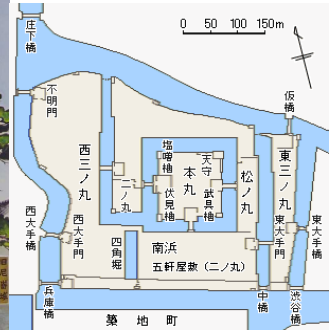
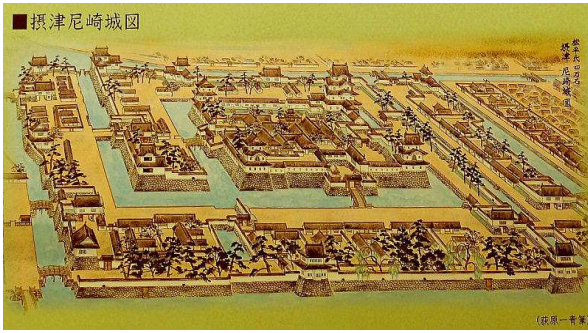


参考 尼崎の歴史 旧尼崎城 城下町とだんじり祭り

今もだんじり祭が残る城南の築地 と 城西(中在家・宮町・屋敷町)地域



江戸時代の尼崎藩



尼崎市南部の旧尼崎城下町 8町

尼崎の歴史 1. 旧尼崎城下町

尼崎は大阪湾の奥 淀川や猪名川・神崎川の河口に位置し、「川尻」と呼ばれ、古代から漁業の盛んなところであると共に、海路瀬戸内へ向かう重要地点。海岸沿いに数多くの島・砂洲が点在する風待ちの湊であり、その海岸には西宮で京へ向かう西国街道と分岐した脇街道 中国街道が大阪へと通じ、尼崎地域(尼崎・大物・塚口・神崎など)は港・街道・淀川から数々の物資が集まる集散地として、中世には堺と並ぶ自由都市として栄えた。

戦国時代を経て、江戸時代の初めには 尼崎の海岸に 大阪西の守りとして「3重の堀を持ち、本丸には4重の天守と3重の櫓を有し、直接海へ出られる尼崎城とその城下町が築かれ、南浜の南端には、中国街道を通す為に木橋で東西に直行させるなど、港のある城下町として繁栄する。



尼崎の城下町は、武家屋敷の区画とは別に、町人たちが住む町屋の区画があり、城の東側の大物・辰巳・風呂辻・市庭・別所の5町は、中世以来の港町である大物・尼崎の区域。そして城の西側 宮町・中在家の2町は城の用地となった地区からそれまで砂州であった新開の地に移して作られた町である。八つ目の新しい町「築地」は、それまで城の南端を通っていた中国街道を迂回させるため、城の南側の葎島〔よしじま〕を造成して寛文4年（1664）につくられた。

水城がある城下町であり、港・街道・淀川から数々の物資が集まる集散地として栄えた「尼崎」。中世以来の港町であった大物町・東町だけでなく、城の城下として新しく作られた中在家などの城西地域や築地にも港の施設がありました。寛永12年（1635）の城下絵図によれば、大物町と東町（辰巳・風呂辻・市庭・別所町）の町場には、「舟乗場」の文字や港の施設である「石カンキ（雁木〔がんぎ〕）」が描かれていて、辰巳町の長遠寺浜と大物橋のたもとの大物浜に大坂への舟乗り場があり、大物浜に面する町並みは旅籠屋が軒を並べていた。また、辰巳町には大坂への街道が通る佃島との間を往復する渡し場もあり、この渡し場が尼崎藩領の東の境だったという。

「別所浜」（別所町南側の浜）には漁業や商売の神様の戎社が祀られていて、廻船や漁船などの荷の積み下ろし、取り引きでにぎわい、別の城下絵図には、中在家町東端（庄下川の西岸）にも雁木が描かれ、また、中在家町の浜には魚市場に多数の漁船が着岸している様子が描かれている。

城下で最も人口の多い町中在家町は、南側には大阪湾にでる水路に面し、街中を走る中国街道・水路沿いには魚市場・生魚問屋をはじめ漁業関係の商人や漁師の町屋が立ち並び東西に細長く延びる湊町。江戸時代 綿作用肥料として干鰯の需要が増えるとイワシを求めて関東地方にまで出漁していたこともあるなど栄え、南側の水路を通り、魚を近海や西国各地から入荷するとともに、城下や京都・大坂方面に売りさばいたという。

また、新しく尼崎城の南側 水路を隔てて 砂洲を埋め立て作られた城下町「築地」は 当初ほかの町から移住してきた人たちが住む漁師町であったが、水路の北の浜沿いには材木問屋が立ち並び、寺町の寺々を建てた大工や商家の町屋並ぶようになり、中在家と共に中国街道が通る城下町として栄えた。

そして、中在家や宮町など城西地区の地域の西北端には貴布禰神社、築地には初島大神宮が鎮座し、これらの町の発展と共に勇壮なだんじり祭りが代々受け継がれ、今に続いている。

「図説尼崎の歴史」等より抜粋整理

尼崎の歴史 2. 近代から現在までの尼崎の発展

明治に入ると農業や漁業も引き続き盛んでしたが、綿や菜種といった近世以来の商品作物や城下町の繁栄を担った中在家の魚市場などは、明治の半ば頃から徐々に衰退。しかし、明治後半から始まった海岸部の広大な埋め立て地には数多くの工場が誘致されるのを皮切りに、尼崎の臨海部は大正・昭和を通じ、重化学工業地帯として発展し、城下町も徐々に活気を取り戻し、特に旧中国街道の道筋にあたる本町通商店街（現在の国道43号線沿い）は、明治後半頃から昭和戦前期にかけて、阪神間でも有数の活況を呈するなど、尼崎は工業都市化が進み、人口も急速に増え、旧城下町は尼崎の中心市街地として大いに発展する。しかし、第二次世界大戦が起こると空襲と疎開で南部の旧城下町を中心とした尼崎の市街地は消失を免れた築地や寺町などを含め、かつての賑わいを失ってゆく。

戦後復興期にはいると尼崎の南部地域には重工業を中心とした大工場群が立ち並ぶ「鉄のまち」としていち早く復活を果たす。かつて中国街道が通り、旧城下の中心だった本町通には 南部の大工場群を結ぶ東西交通の要として広い国道43号線が建設されると共に、工場街と居住地区が南北に分断され、街の中心も北に移ってゆく。

戦後尼崎の市街地もまず商店街の再建から始まり、杭瀬・出屋敷などの商店街が活気を取り戻し、戦時疎開と空襲によりかつての面影を失った本町通商店街の多くの店が移転、開設した中央商店街も、これに続き、現在の阪神尼崎駅から出屋敷駅へと続く中心商店街が形成されてきました。

そして、築地や中在家などの旧城下町は中心市街地から、その地域に根ざした街へと移ってゆく。一方、工業生産も、昭和25年の朝鮮戦争にともなう特需景気によって息を吹き返し、やがて高度



経済成長期にかけて、鉄鋼を中心とする工業都市尼崎が復活を遂げていきました。
この時期の尼崎にとっての最大の課題は、工業用水の汲み上げによる地盤沈下が原因となって、毎年のように繰り返される高潮被害を防ぐための防潮堤の建設でした。
特に昭和 25 年のジェーン台風は、戦前の室戸台風以上に深刻な被害を尼崎市域にもたらしました。
このため、尼崎の海岸部全域を覆う大防潮堤の建設が計画され、昭和 30 年度中に完成。
尼崎港は防潮堤の外に新たに作られた大型船岸壁とスエズ運河式の閘門から出入りする旧来の内港の二つに分かれた。

工業都市としての繁栄から脱皮し、21 世紀への新しい街づくりへ

高度経済成長期には、工業生産の拡大に加えて、北部を中心とした住宅地開発も一層進み、市域の農地は急速に失われ人口の増加も著しく、昭和 45 年には 55 万 4 千人とピークを迎えるが、同時に、地盤沈下に加えて大気汚染や河川水質汚濁、騒音等の公害問題が一層深刻となるなど、急速な都市化の弊害がさまざまな形であらわれた。
工業用水道の設置（昭和 33 年給水開始）や公害防止協定の締結（昭和 44 年第 1 次協定）など、抜本的な公害対策がはかられ、さらに昭和 48 年の第 1 次オイルショック以降、日本経済の構造変化が進むなか、戦前以来の尼崎の工業も大きな転換をせまられ、工場の転出や閉鎖、人口の減少など、都市としての活力の停滞を余儀なくされてゆく。
こうしたなか、1980 年代から 90 年代にかけて、都市環境の整備・保全や市民福祉の充実、産業構造の転換、文化の振興など、市民の生活や意識の変化、時代の要請に応じた施策が取り組まれてきた。
また、平成 7 年には阪神・淡路大震災によって大きな被害を受け、その復興もまた大きな課題となった。
このように、現在 尼崎市は引き続きさまざまな都市課題に直面しているが、これらの課題の解決と都市の活性化をめざして、21 世紀における新たなまちづくりが進められている。

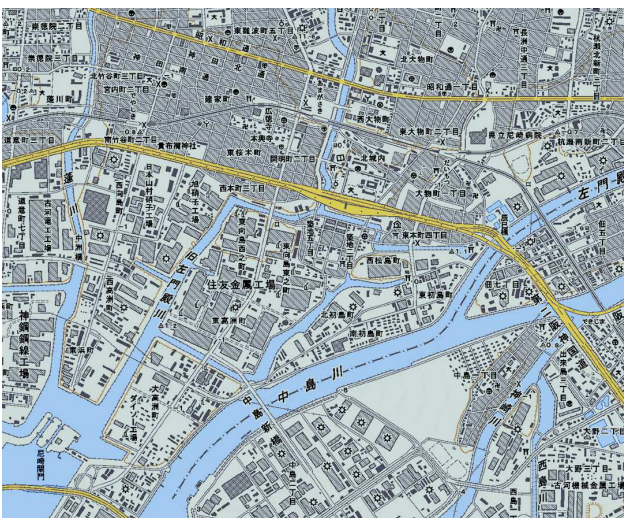
そんな中で、尼崎のだんじり祭は「尼っ子の血が騒ぐ」と尼崎の人たちの「ふるさと」として今も街づくりの一翼を担っている。

尼崎南部の旧尼崎の城下町地域は第二次世界大戦の空襲と疎開による街の空洞化と戦後の南部重工業地帯の大きな発展によって、尼崎の中心市街地の役割を終えましたが、多くの人々が住むそれぞれの地域の中核市街地として生き続けている。そして、地域の人たちによって継承され地域の支えとなってきたのが地域伝統の祭り「だんじり祭」である。

中在家町・宮町など城西地域 「貴布禰神社のだんじり祭」

南の築地地区 築地「初嶋大神宮のだんじり祭」。

私のふるさとは旧城下町ではなく、もう少し北の地域なのですが、子供の頃 私の町にも「八幡神社のだんじり」があり、また、貴船神社や初島大神宮のだんじり祭にはよく見物に連れて行ってもらいました。
そして、耳には あの尼崎独特のだんじり囃子の鐘の音と激しくぶつかり合うだんじりの記憶が残っていて、私もまただんじり囃子をきくと血が騒ぎます。



3. 尼崎の「地車・だんじり」

「だんじり祭」という街中を猛スピードで駆け抜ける「岸和田のだんじり祭」が有名であるが、このほか河内・和泉や神戸・尼崎などにもあり、それぞれ、神社の大祭にあわせて 各町内の地車（地車と書いてだんじりと読む）が引き回され、街を練る。そして地域によって、それぞれ地域に根ざした引き回しが行われる。

尼崎では、地車と地車が前の部分を上げてぶつかり合う尼崎独特の「山あわせ」が行われる。

かつては、街中で繰り広げられた「山あわせ」別名「だんじりのけんか」と町ではいい、かつては激しい荒くれの祭で、負傷・小競り合いなどが絶えなかったが、交通事情の変化もあって、街中での「山あわせ」は禁止された。現在は厳しいルール規制・遵守のもと、山あわせ場で演技として「山あわせ」が行われている。

2台の地車が向かい合い、前の部分を上げながらぶつかりあい、上手く肩背棒といわれる棒（地車の引き棒）を先方の地車に乗せて、相手の地車を制してしまうと勝負ありという演技である。

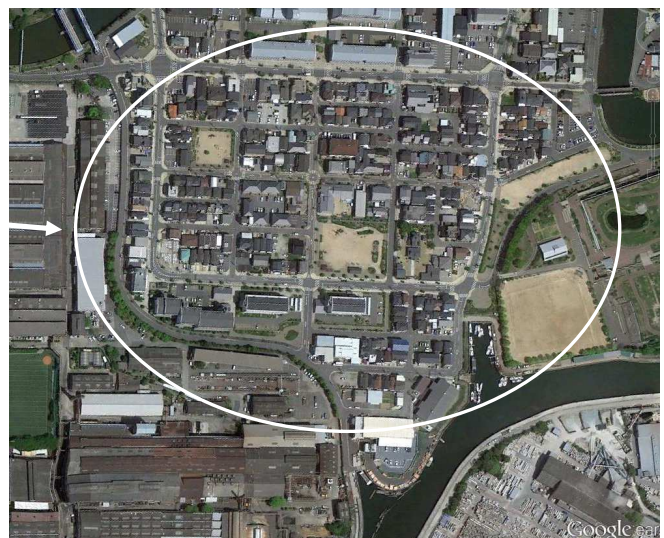
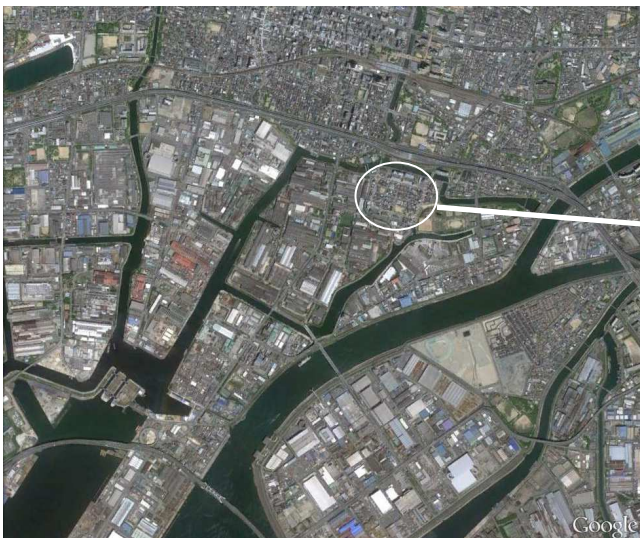
演技とはいえ、急テンポのだんじり囃子が鳴り響く中で 地車と地車がぶつかり合う戦いで、迫力満点である。



尼崎 築地だんじり祭「山あわせ」2013. 9. 16. 夜

子供の頃には 祭りというこの「だんじりのけんか」を見るのが楽しみでしたが、街中での「山あわせ」が禁止され、巡行だけとなって、足が遠のいていましたが、一昨年夏 貴布禰神社の夏祭「だんじり祭の宮入巡行」を見て、今度はぜひ「山あわせ」を見たいと。そんな折、築地に住む友達から「昔のだんじり祭の風情を残しているのは築地が一番 ぜひ見においで」と声をかけてもらった。昨年はよう出かけませんでした。この9月16日 「初嶋大神宮大祭のだんじり祭・山あわせ」を久しぶりに見に出かけました。

また、「築地」地区は周囲を運河で囲まれた工場地帯の一角にある街で運河の南の向島地区はよく通った工場街。「山あわせ」が始まる前に 時間がありましたので、この向島を取り囲む運河に沿って歩いてきました。



かつての尼崎城下 築地の町の位置



江戸時代初期に築かれたかつての尼崎城下 築地

尼崎の漁師たちや魚問屋が、関東にまで進出していたという話もあり、
東京の「築地」は この「尼崎の築地」から名づけられたという人もいる



築地初島大神宮 だんじり祭 2013年9月16日夜